

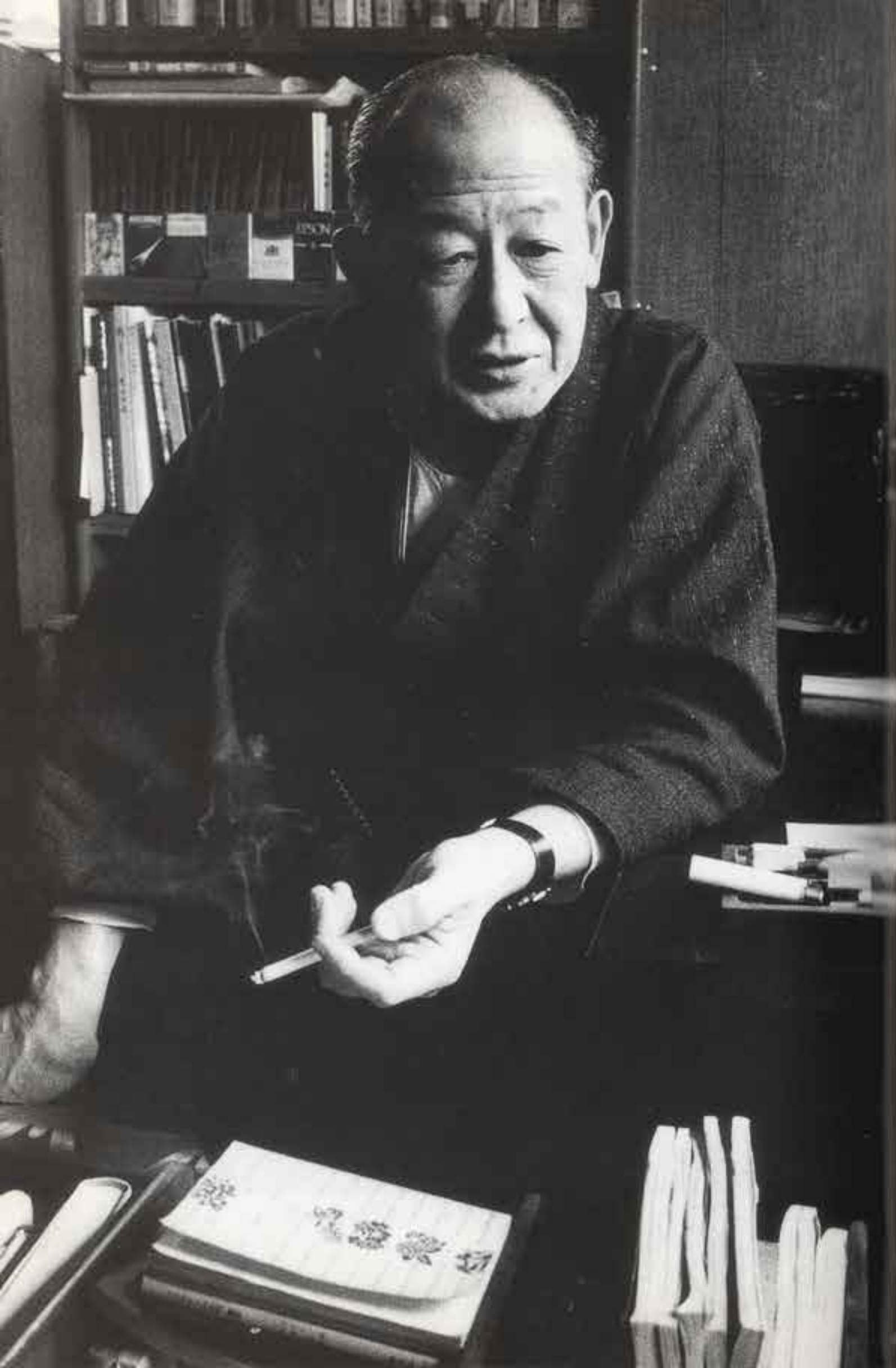
越中人譚

磯部四郎

竹田省

沼田稻次郎

【法律】



労働法学界を先導した法学者 沼田稲次郎

日本の労働法学の礎を築いて自ら実践

理論と実践——。この対置される語句をそれぞれ象徴する人格は、時としてまったくの矛盾を生む。しかし、また時としてそれが破綻なく統一され、しかも自己の器に収めうる人格というのもわずかだが存在する。

労働法学界をリードした沼田稲次郎は、戦後の労働法学を「沼田労働法学」として理論化・体系化して礎を築き、またその一方で、労働運動や平和運動の渦中に積極的に自らを投じ続けた人物である。

沼田稲次郎は大正三年（一九一四）五月二十五日、高岡市新横町（後に桜馬場に移転）に父沼田勇三郎、母すいの次男として生まれた。父勇三郎は津沢町新西（現小矢部市）から高岡に出て、弁護士として約半世紀にわたって活躍し、富山県弁護士会会長も務めた人物である。稲次郎は高岡市立定塚町尋常小学校を経て、県立高岡中学校（現高岡高等学校）に入学した。中学校の数学教師松野尾照景が解雇されたとき、稲次郎は解雇反対・校長排斥のストライキのリーダーになったという。

昭和六年（一九三一）、稲次郎は第四高等学校（現金沢大学）文科甲類に入学した。当時の学生の多くがそうであったように、稲次郎もまた、マルキシズムと夜の街にその青春の気焔を上げていた。

昭和九年（一九三四）、稲次郎は京都帝国大学法学部法律学科（以下「京大」と略称）に入学。時あたかも滝川事件（京大法学部教授滝川幸辰の著書が共産主義的であるとして、文部大臣鳩山一郎が強制罷免した事件）の翌年で、反対運動と弾圧の余燼が治まらぬなか、稲次郎も講義中にピラを撒いたり、治安維持法違反容疑で逮捕（不起訴）されたり、無期停学処分を受けたりしつつも、「美酒に酔い、極道もできた」（晩年の随筆集『行人有情』）という。

しかし、稲次郎はこの京大時代に加古祐二郎教授と出会い、弁証法的唯物論に根ざす唯物史観に目覚めていく。マルクス主

義的社会主義は、稲次郎の生涯にわたる思想の根底を成した。

※

満州事変、天皇機関説攻撃、二・二六事件、そして日中戦争へと突入する激動期に学生時代を過ごした稲次郎は、昭和十三年（一九三八）に京大大学院（特選給費生）に進み、石田文次郎博士のもとで社会法・民法を学ぶ。しかし、その翌年には富山の歩兵第三十五連隊補充隊に徴兵され、七年間の軍隊生活が始まった。入営前日までかかってドイツの労働協約法理についての論文を書いて石田博士へ送り、学問の世界と決別した。稲次郎二十六歳であった。

昭和十五年（一九四〇）から五年間、稲次郎は中国河北省（邯鄲・磁県）に派遣され、終戦は療養中の陸軍病院（岐阜県下呂）で迎えた。初年兵のときから上官や規制に従順ではなく、豪傑と渾名された稲次郎だが、彼が教育した岐阜県や長野県の初年兵たちによって戦後、「沼田会」（後に稲次郎の雅号から「無縫会」と改称）



写真／沼田稲次郎 [現代法と労働法学の課題] より転載

が結成されているところから、部下との厚い交情のほどが察せられる。

昭和十八年（一九四三）に一時帰国した稲次郎は、石田博士のもとを訪れ、その娘・文子と出会う。復員後、三年間待たせた文子と結婚した（軍事郵便で深まった交際は、遺稿集「人間まんだら」に詳しい）。戦争は稲次郎から多くの戦友や部下、兄弟夫婦（戦後、兄は原爆病で逝去）の生命を、さらに高岡の実家をも強制疎開により奪った。この怒りは稲次郎をして、生涯をかけて権力に抗し、労働者のために邁進する原動力となった。

※

昭和二十一年（一九四六）、やむなく京都桃山に寓居した稲次郎は、夕刊京都新聞社に入社。論説委員として講演や執筆する多忙な日々の中、驚異的な精力で「生産管理論」を、同二十三年には「日本労働法論（上・中）」を出版した。後に、「戦後の言論の自由に興奮し、何か書きまくってみたい心境になった」と述懐している。

しかし、そんな稲次郎はレッド・パージ（昭和二十五年、GHQの指導により政府・企業が行なった日本共産党員とその同調者に対する一方的な解雇）の煽りを受けることとなり、同年七月に新聞社を退社したが、稲次郎は屈しなかった。それどころかわずか四カ月後の



写真／金婚を迎えた沼田稲次郎と妻文子 【人間まんだら】より転載

十一月には「労働法論序説」を出版するのである。

これらの著書は、戦後日本の労働法学を初めて本格的に理論化体系化したもので、その後の労働法学を基礎つけた名著といわれるが、それは稲次郎の不屈の精神が生み出したものである。もつともその陰には文子夫人の内助の功も大きい。新聞社の月給やわずかな失業保険はすべて書籍代などに消え、夫人はただの一度も現金を見せてもらわなかったことがなく、随分と着物を売りに走りまわったという。

※

戦後日本の労働運動は、再軍備化・破防法制定・労働法改悪など、いわゆる「逆コース」といわれる時代に燃え上がり、共産党に指導された産別会議が、次いでそれに対立した総評がその主流となるが、その総評も離合集散を繰り返した。

このような流れの中、昭和二十六年（一九五一）稲次郎は東京学芸大学教授に、翌二十七年には三十年間籍を置くことになる東京都立大学の教授に就任し、法学博士の学位を授与される。その頃から以前にも増して精力的に論文・著作を発表する。「団結権擁護論（上・下）」（同二十七年）、「市民法と社会法」（同二十八年）、「悪法と労働基本権」（同二十九年）、「団結の研究」（同三十年）、「運動のなかの労働法」（同三十七年）などの著作では、自ら「序説」で示した労働法学を、歴史過程と真摯に向き合いながら、詳細に肉付けして精錬していくのである。

法学のみならず、法哲学や法解釈学などにまたがるその膨大な研究成果は、学界・実業界の注視するところとなり、いつしか「沼田労働法学」と呼ばれるようになる。後（昭和五十五年）に稲次郎は、「苦悩に満ちた組合運動の提起する具体的な問題をめぐって法理を考え、全体的意味関連を究明し、労働法学を深めてゆくのは、はりあいのある理論的作業であった」と回顧している。

しかし、稲次郎は机上に空論を並べるだけの学者ではなかった。常に自ら理論と実践との統一を強調する立場をとり、炭鉱・海員・林野・国鉄・教師など全国各地の労働組合を訪れ、講座やストライキの場で盛んに発言して支援する社会的活動を積み重ねた。人民を取り締まる権力のための法律学から、民衆の権利を守るための法律学へと転換せしめるのは、労働者の闘志と力溢れる集団的エネルギーにはかならないことを、新聞社時代

に自ら組合長として活動していた稲次郎は、身をもって知っていたのである。

※

稲次郎は、早稲田大学や京都大学など多くの他大学へも出講した。その講義は厳しきなかにも愛情溢れるもので、優れた教育者でもあった。日本学術会議会員(昭和四十七年同五十年)を務めたほか、日本労働法学会、民主主義科学者協会・法律部会、日本法社会学会、日本民主主義法律家協会、国際民主法律家協会などの理事を務めた。そして昭和五十一年(一九七六)、膨大な著作を『沼田稲次郎著作集』(全十巻)にまとめ、同五十六年には総長を二期八年務め終えた東京都立大学を退官した。

稲次郎はまた、「遊び」の大切さも知っていた。幼い時より俳句・漢詩・碁に親しんでいた。学生・軍隊・大学時代を通して周囲に碁を広め、時には別荘の信州蓼科の山荘(聴松閣)に仲間を集めて「蓼科本因坊」もやった。人の和を大切にしていた稲次郎は「手談」(碁の雅称)の効能を熟知していたのである。

晩年、稲次郎は「平和、教育、女性、医療の四つの問題をこゝれからの仕事にする。一言でまとめれば人間の尊厳の追求だ」と語り、「後期沼田労働法学」ともいえる「人間の尊厳」論を展開し、草の根運動という形で実践していく。すなわち、非核の政府を求める会、原水爆禁止日本協議会、日本AALA(アジア・アフリカ・ラテンアメリカ連帯委員会)などへの参加や、国民医療研究所設立の提唱・設立などである。

しかし、昭和六十三年(一九八八)、稲次郎は脳梗塞で倒れ、言語を失う。八年間にわたる闘病生活で夫人の献身的な介護を受け、平成九年(一九九七)五月十六日逝去。享年八十二歳であった。

文・仁ヶ竹亮介(高岡市立博物館学芸員)

略歴【沼田稲次郎 めまたいねじろう】

- 大正三年(一九一四)五月二十五日、高岡市新横町に父沼田勇三郎、母すいの次男として生まれる。
- 昭和六年(一九三一)第四高等学校に入学。
- 昭和九年(一九三四)京都帝国大学法学部法律学科入学。
- 昭和十四年(一九三九)富山第三十五連隊補充隊に入営。
- 昭和二十一年(一九四六)京都桃山に転居。夕刊京都新聞社に入社。「生産管理論」を刊行。
- 昭和二十三年(一九四八)『日本労働法論』(上・中)刊行。
- 昭和二十五年(一九五〇)退社。日本労働法学会理事。
- 昭和二十六年(一九五一)東京学芸大学教授に就任。
- 昭和二十七年(一九五二)法学博士の学位を授与される。
- 昭和二十八年(一九五三)『市民法と社会法』刊行。
- 昭和二十七年(一九五二)『運動のなかの労働法』刊行。
- 西ドイツ・ケルン大学に留学(同三十八年)。
- 昭和四十一年(一九六六)『現代の権利闘争』刊行。東京都立大学法学部長に選任される(同四十四年)。
- 昭和四十八年(一九七三)東京都立大学総長に選任される(同五十六年、二期連続)。
- 昭和五十一年(一九七六)『沼田稲次郎著作集』刊行。
- 昭和五十六年(一九八一)大学退官。同大学名誉教授。
- 昭和五十七年(一九八二)日本国際法律家協会会長に就任。
- 昭和六十年(一九八五)国民医療研究所を提唱、設立。
- 平成九年(一九九七)五月十六日逝去。享年八十二歳。

法学のみならず、法哲学や法解釈学などにまたがるその膨大な研究成果は、学界・実業界の注視するところとなり、いつしか「沼田労働法学」と呼ばれるようになる。

- 第一号 〔郷土〕 大井冷光・船久允・大田栄太郎
- 第二号 〔国際〕 林忠正・高建謙吉・堤根寿安
- 第三号 〔剣技〕 馬場はる・駒巖・其木文右衛門
- 第四号 〔医学〕 黒川良安・石川日出鶴丸・佐藤やい
- 第五号 〔情報〕 瀬木博尚・正方松太郎・角川源義
- 第六号 〔電遊〕 金剛又左衛門・山田忠作・加藤金次郎
- 第七号 〔芸能〕 高松梅治・川原田政太郎・元井豊蔵
- 第八号 〔詩壇〕 田中冬二・高島高・瀧口修造
- 第九号 〔横綱〕 梅ヶ谷藤太郎・木刀山健右衛門・立浪綱右衛門
- 第十号 〔教育〕 南日垣太郎・山崎兵藏・並武果マールレット
- 第十一号 〔農地〕 松村謙三・萩原正清・穂名通三
- 第十二号 〔起業〕 浅野崎一郎・黒田善太郎・大谷兼太郎
- 第十三号 〔童話〕 室崎琴月・多胡羊太・井口文彦
- 第十四号 〔淡谷〕 福松次郎・山田耕・宇治長次郎
- 第十五号 〔島人〕 小杉復堂・田部重治・吉沢虎作
- 第十六号 〔鞍馬〕 谷口節道・萩野昇・堤田くに
- 第十七号 〔芸能〕 富士月子・常磐津明石大夫・津村謙
- 第十八号 〔法曹〕 細野長良・金山平造・石坂修一
- 第十九号 〔有線〕 林良二・高柳博・安部武雄
- 第二十号 〔園遊〕 石黒宗康・松原定吉・松本謙三
- 第二十一号 〔史蹟〕 畑正吉・関井喜太郎・大野為次
- 第二十二号 〔工場〕 水倉豊信・林喜太郎・高瀬保
- 第二十三号 〔金融〕 河合長成・井村亮喜・吉田忠雄
- 第二十四号 〔金蔵〕 安田善次郎・中田清兵衛・泉田元吉郎
- 第二十五号 〔言論〕 井上江花・横山源之助・海内聚
- 第二十六号 〔園文〕 山田素雄・志田義彦・高崎正彦
- 第二十七号 〔砂防〕 沢久・アレス・赤木正雄・高田重太郎
- 第二十八号 〔建築〕 佐伯宗義・金剛幸二・大矢四郎兵衛
- 第二十九号 〔官修〕 南弘・牛取虎太郎・大橋八郎
- 第三十号 〔造形〕 木保真太郎・中野双山・竹内源造
- 第三十一号 〔自然〕 石井達太郎・菊池勲左エ門・榎木忠夫
- 第三十二号 〔音楽〕 磯井直秋・高陽竹夫・黒坂常治
- 第三十三号 〔文壇〕 藤氏鶴太・柏原兵三・堤田善衛

- 第三十四号 〔知事〕 高辻武邦・吉田実・中田幸吉
- 第三十五号 〔万葉〕 五十嵐篤好・高沢瑞信・田辺武松
- 第三十六号 〔花街〕 加茂善治・水野豊造・遠野久五郎
- 第三十七号 〔蘭花〕 沼田喜三郎・川崎元治・佐野キク
- 第三十八号 〔歌壇〕 茂井嘉一・横山順三・木俣修
- 第三十九号 〔民権〕 精垣示・新田孝之・米沢誠三郎
- 第四十号 〔汽船〕 馬場道久・藤井徳三・南崎剛作
- 第四十一号 〔私塾〕 園田兵衛・小西有良・大橋十右衛門
- 第四十二号 〔藝遊〕 平岡初枝・高木常代・法酒正
- 第四十三号 〔学園〕 笠原研寿・金山藤雄・梅原良隆
- 第四十四号 〔達人〕 香藤弥九郎・石黒信由・江尻健治
- 第四十五号 〔生菓〕 中川幸子・星かつふ・宮本一枝
- 第四十六号 〔俳諧〕 柳沢金広・中沖大七郎・榎井勲六
- 第四十七号 〔映画〕 河内清一・丸根賛太郎・佃魚叔
- 第四十八号 〔反骨〕 金山從革・若宮卯之助・細川嘉六
- 第四十九号 〔創作〕 今板基三・上坂傳次・金岡基三
- 第五十号 〔書道〕 加藤宗厚・村上清道・岩倉規夫
- 第五十一号 〔佛道〕 前田善雄・倉尾梅の門・坂井竹の門
- 第五十二号 〔棟梁〕 岩城庄之夫・藤井助之丞・中村外二
- 第五十三号 〔蒐集〕 柴田不藏壽・藤井三友・長崎藤三
- 第五十四号 〔菜園〕 川田順・古井勇・井上清
- 第五十五号 〔官選〕 関重正文・浜田恒之助・白上徳吉
- 第五十六号 〔建築〕 清水春助・松井角早・吉田鉄郎
- 第五十七号 〔技匠〕 大島五郎・米治一・須賀松園
- 第五十八号 〔文学〕 岩崎洋太郎・田部隆次・尾島庄太郎
- 第五十九号 〔書道〕 内山外川・青柳石蔵・上原欣堂
- 第六十号 〔女流〕 小笠原幸子・沢田はな子・方等みゆき
- 第六十一号 〔法律〕 磯部四郎・竹田清・沼田植次郎

地中人権〔法律〕

発行日 平成十五年(二〇〇三)七月十日 第一版・第一刷
 発行人 中産者連(株)株式会社チューリップテレビ
 本社 社、高岡市本小路五番十三号
 電話(〇七六)二六、六〇〇〇
 放送センター、富山県高岡市町八番二十四号
 電話(〇七六)四四二、七〇〇〇

編集人 岡田徳右衛門 第一「岡田編纂事務局」
 富山県中野一丁目三十番五号
 電話(〇七六)四三、八八三〇
 岡田徳右衛門 第一

写真 岡田徳右衛門 第一

印刷 香野印刷製本株式会社

- 富山県図書館協会・推薦
- 富山県郷土文化会・推薦
- 富山県民生涯学習カレッジ・推薦
- 富山県小中学校協会・推薦
- 富山県中学校協会・推薦
- 富山県高等学校長協会・推薦
- 富山県PTA連合会・推薦
- 財団法人富山県教育記念館・推薦
- 財団法人サントリー文化財団・推薦

定価 五〇円(税別)